

P4-1 PDCA サイクルにおける OJT を用いたセラピストの教育の効果

○西村 瞬(にしむら しゅん)¹⁾, 本村 圭司¹⁾, 石田 順子²⁾

1)医療法人 双葉会 西江井島病院 リハビリテーション科, 2)神戸大学大学院 保健学科

Key word : OJT, PDCA, 教育システム

【目的】 1966年の理学療法士及び作業療法士法制定時からセラピストを取り巻く環境は大きく変化し、現在では経験年数に関係なくセラピストの臨床能力の標準化が重要な課題である。臨床ではPDCAサイクル(Plan:治療計画を立案、Do:実行、Check:再評価 Act:プランの改善)をもとに治療にあたっている。これまでの当院の教育方法は、新人教育以外は症例報告などを通して指導し、必要に応じ各自が相談をするシステムであった。今回は、既存の教育システムに職場で指導者を実施する on the job training(OJT)を加えた。OJTを用いた教育の効果検証と教育のニーズ等を報告する。

【方法】 当院のOJTシステム:理学療法(PT)・作業療法(OT)・言語聴覚療法(ST)の各部門に経験年数が10年以上のセラピストをOJT担当者として一名配置した。各セラピストは必要に応じてOJTに依頼し指導を受ける。依頼はPDCAのどのタイミングでも可能で、指導方法は口頭指導だけではなく、治療介入中に患者を通して直接指導を行う。調査対象者:病院勤務のPT、OT、ST(n=50)、経験年数は 6.2 ± 5.4 年。調査方法:アンケートを用いて一年間を振り返り、各自の臨床能力の自己評価を実施した。調査項目はActivities of Daily Living(ADL)練習、情報収集、評価(動作分析・検査・測定)、統合と解釈、各療法の介入の項目ごとに理解、達成の度合いを調査した。回答方法は、理解度(1. 十分理解できた、2. 少しは理解できた、3. 変わらない、4. 理解できなかった)、達成度(1. 十分行えるようになった、2. 一部行えるようになった、3. 変わらない、4. 全く行えない)の4段階とした。

【説明と同意】 本調査は西江井島病院倫理委員会の承認を得て、対象者に本調査の説明と同意を得て実施した。

【結果】 OJTを実施した群(以下:実施群)は29名で経験年数は 4.7 ± 4.3 年、OJTを実施しなかった群(以下:非実施群)は21名で経験年数は 8.2 ± 5.9 年であった。OJTとしての指導数は99件、その内訳はADL14件、情報収集4件、評価19件、統合と解釈12件、各療法の介入42件、その他8件であった。OJTの利用は、患者への介入を開始してから相談を受ける場合が多かった。アンケート結果は、理解度の平均得点(実施群/非実施群)が、ADL練習($1.7 \pm 0.7/1.9 \pm 0.6$)、情報収集($2.0 \pm 0.4/2.0 \pm 0.5$)、評価($1.8 \pm 0.5/2.0$)、

± 0.7)、統合と解釈($2.1 \pm 0.5/2.1 \pm 0.6$)、各療法の介入($1.8 \pm 0.4/2.2 \pm 0.5$)であった。達成度の平均得点(実施群/非実施群)は、ADL練習($2.0 \pm 0.4/2.1 \pm 0.5$)、情報収集($2.0 \pm 0.2/2.1 \pm 0.5$)、評価($2.0 \pm 0.3/2.4 \pm 0.5$)、統合と解釈($2.2 \pm 0.5/2.3 \pm 0.6$)、各療法の介入($1.9 \pm 0.4/2.2 \pm 0.5$)であった。理解度、達成度共に実施群の方が向上を示した。実施群における理解度・達成度の比較は、平均得点(理解度/達成度)は、ADL練習($1.7 \pm 0.7/2.0 \pm 0.4$)、情報収集($2.0 \pm 0.4/2.0 \pm 0.2$)、評価($1.8 \pm 0.5/2.0 \pm 0.3$)、統合と解釈($2.1 \pm 0.5/2.2 \pm 0.5$)、各療法の介入($1.8 \pm 0.4/1.9 \pm 0.4$)であった。殆どの項目において理解度が達成度より向上度は高い結果となった。

【考察】 実施群が非実施群よりも理解度・達成度ともに向上度合いは高く、OJTの効果を示した。また実施群の年齢層より5年目までのセラピストが治療の指導を必要としていることが分かった。またOJTの介入時期より、PDCAサイクルではPlanの現状を把握・分析、具体的計画の立案とDoの計画を基に実行の段階で指導を求めている。個々のセラピストは自分なりのプランを立案しているがそれが最良のものか、また評価や治療技術に不安を感じていると考えられる。また依頼件数では評価と各療法の介入に依頼が多く、同時にOJTの効果も高い。これはOJTの介入により、実際に患者を通してプランの考え方や治療の指導を受けることで個々が気づいていないことを学習できたと考える。理解度に比較して達成度が低い理由としては、OJTで知識や理解は深めることはできたが、OJT後に自身が治療を実施するなかで、客観的評価がないために達成度に自信がもてないことが予測される。今後、達成度を高めるには、PDCAのCheckで再評価を通して治療効果を検証することが重要で、またOJTは依頼時の指導だけでなく、PDCAサイクルを通して継続的な指導が必要と考える。

【理学療法研究としての意義】 セラピストの臨床領域の拡大に伴いセラピスト育成は重要な課題である。OJTについては、人材の育成手法であるが、その効果報告は殆どない。本研究は臨床場面でのOJTがセラピスト育成の方法として、理解度や達成度に良い影響を与える可能性があることが示唆された。